

## 第4章 遺構と遺物

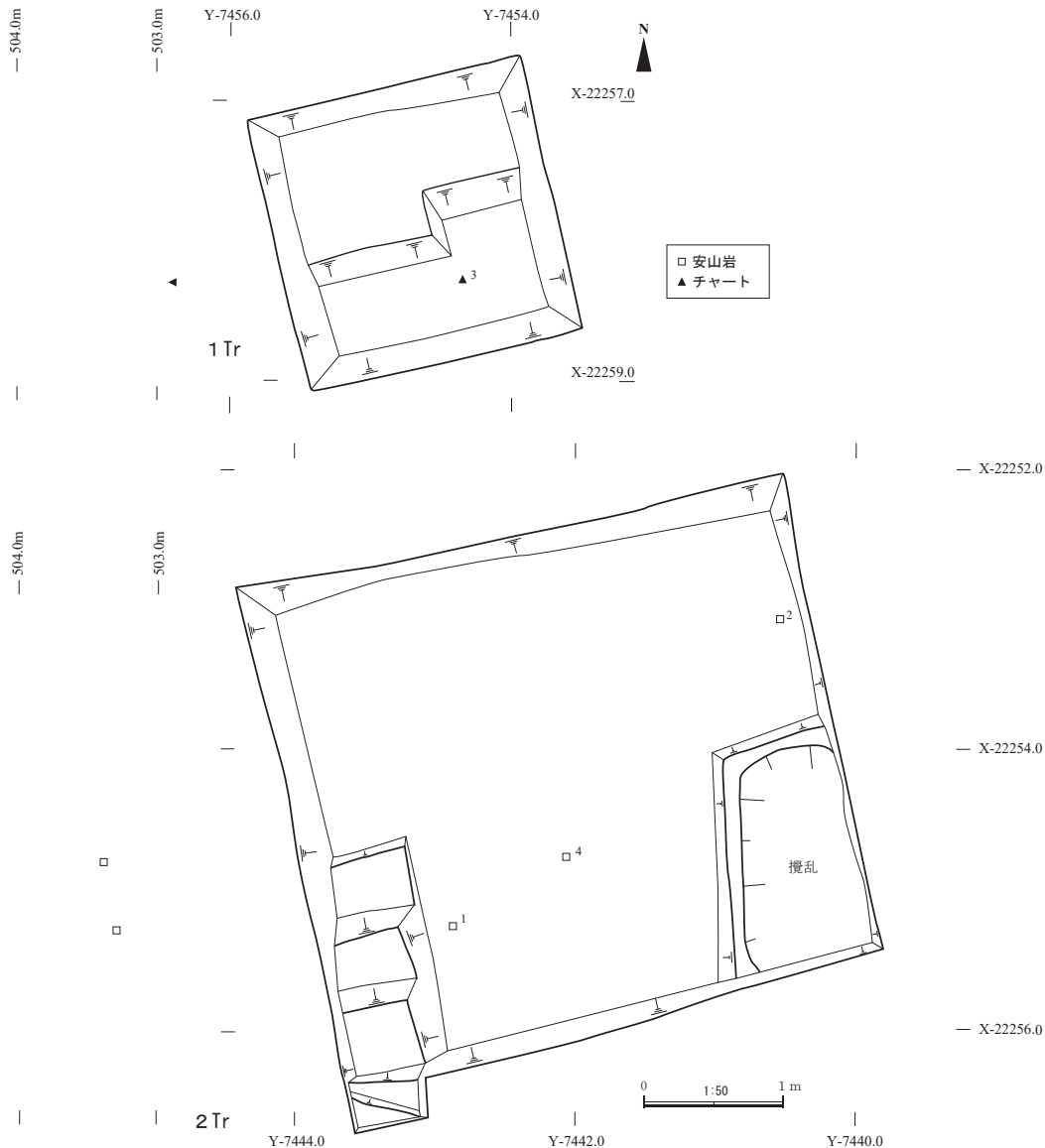
### 1. 第1文化層

#### (1) 遺物の出土状況

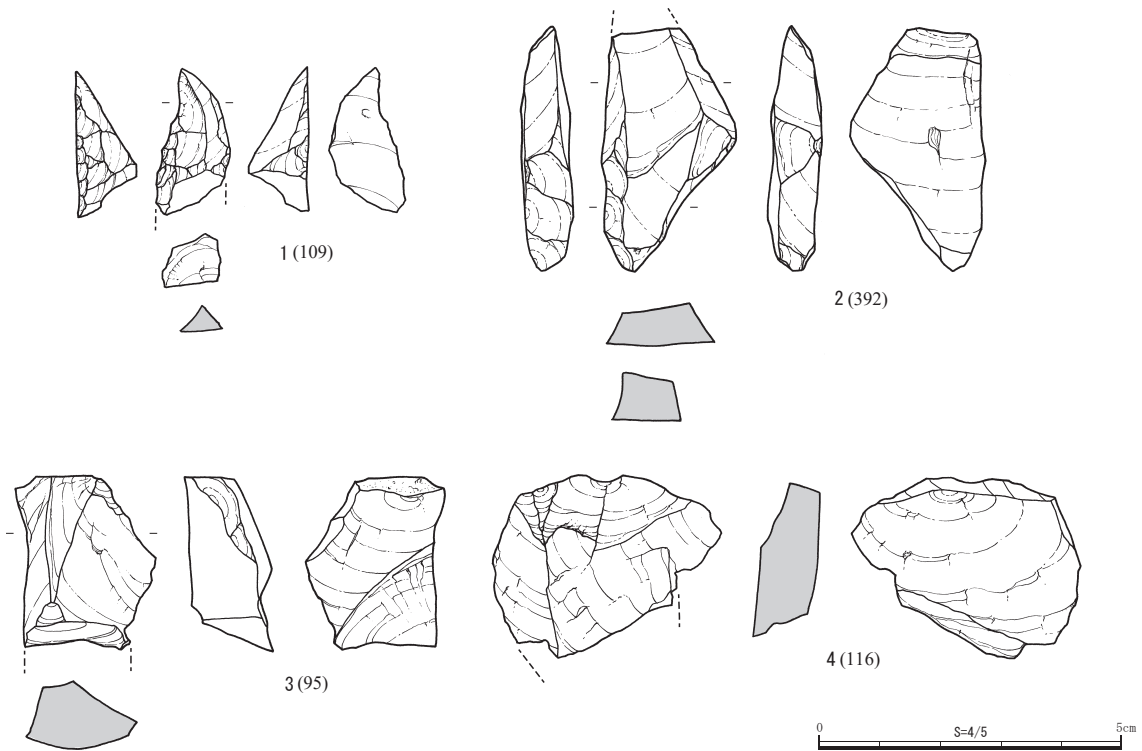
7層は、1トレンチのおよそ半分で完掘しているが、それ以外の調査区では上面のみの検出である(第14図)。したがって、石器群の分布は暫定的なものである、7層出土石器4点(1トレンチ1点、2トレンチ2点)であり、1トレンチのみ7層中位から出土し、その他は全て上面からの出土である。石材の内訳は、安山岩3点、チャート1点と(第3表)、後述の第2文化層(細石刃石器群)とは明らかに利用石材が異なる。これは河原第3遺跡など周辺遺跡の様相と合致する様相である。全容解明は今後の調査に委ねたい。

第3表 第1文化層の石器組成

	安山岩		チャート	計
	岩戸	阿蘇		
KN	1			2
RF	1			
FL		1	1	2
計	2	1	1	2



第14図 第1文化層遺物分布図



第15図 第1文化層出土石器

(2) 出土遺物

第15図1は、二次加工のある剥片。厚みのある剥片の両側辺に腹面側から二次加工を施す。先端は尖頭状を呈する。下部を欠損する。岩戸安山岩製。同2は、ナイフ形石器を考えられる。縦長剥片を素材として、左側縁下部のみに二次加工を施す。ここが基部と考えられる。先端を欠損する。岩戸安山岩製。3、4はいずれも剥片。3はチャート製で、自然面を打面とするもので、やや厚みをもつ。下部を欠損する。4は多孔質安山岩製で、やや幅が広い。下部を欠損する。

以上のように、いずれも遺跡近傍産の石材を素材とする石器である。1、2はツールと考えられるが、時期を特定できるような石器とはいいがたい。

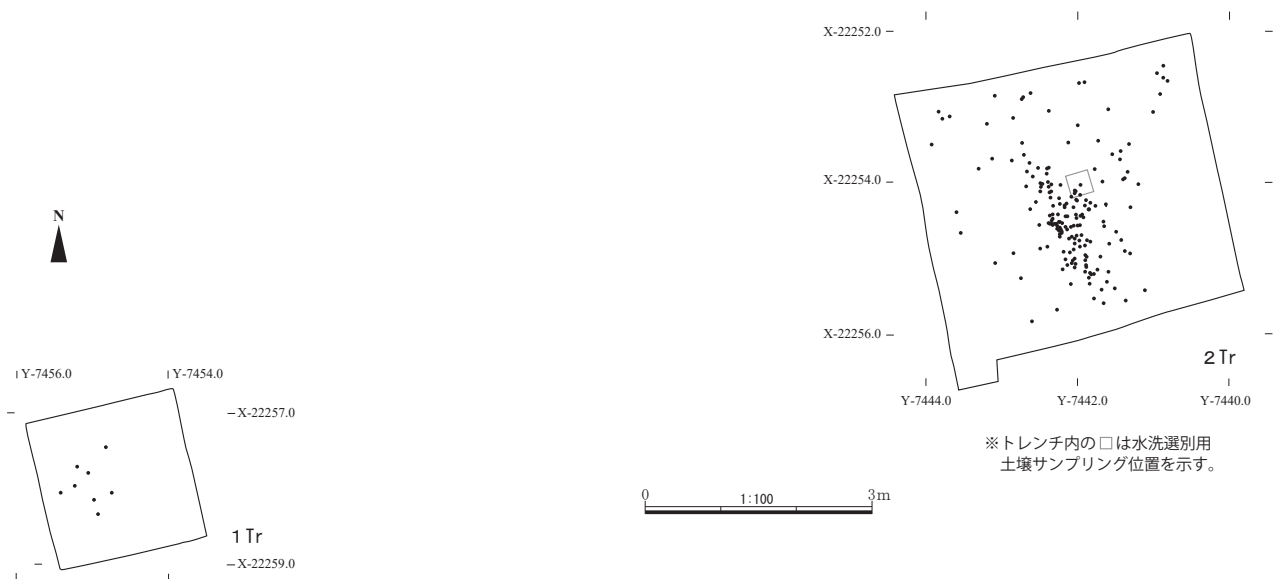
2. 第2文化層

(1) 遺物の出土状況

第2文化層石器群は、6層を出土層準とする。礫群などの遺構は現状では見つかっていない。出土石器のほとんどは黒曜石製で、ほかに安山岩やチャート製の石器がある(第4表)。細石刃や細石刃核のほか、削器や加工痕や微小剥離痕のある石器が複数認められ、これらがセットをなす細石刃石器群と考えられる。1、

第4表 第2文化層の石器組成

	黒曜石						安山岩		チャート	計
	腰岳	針尾	椎葉川	小国	阿蘇4	阿蘇	西北	岩戸		
MB	9		21							29
SC									1	1
RF							1		1	2
MF	5				1					6
FL	24	1	1	9	2	2	3	8	2	50
CH	69			8		13		3		96
MC	1									1
CO	2									2
計	110	1	22	17	3	15	4	11	4	187

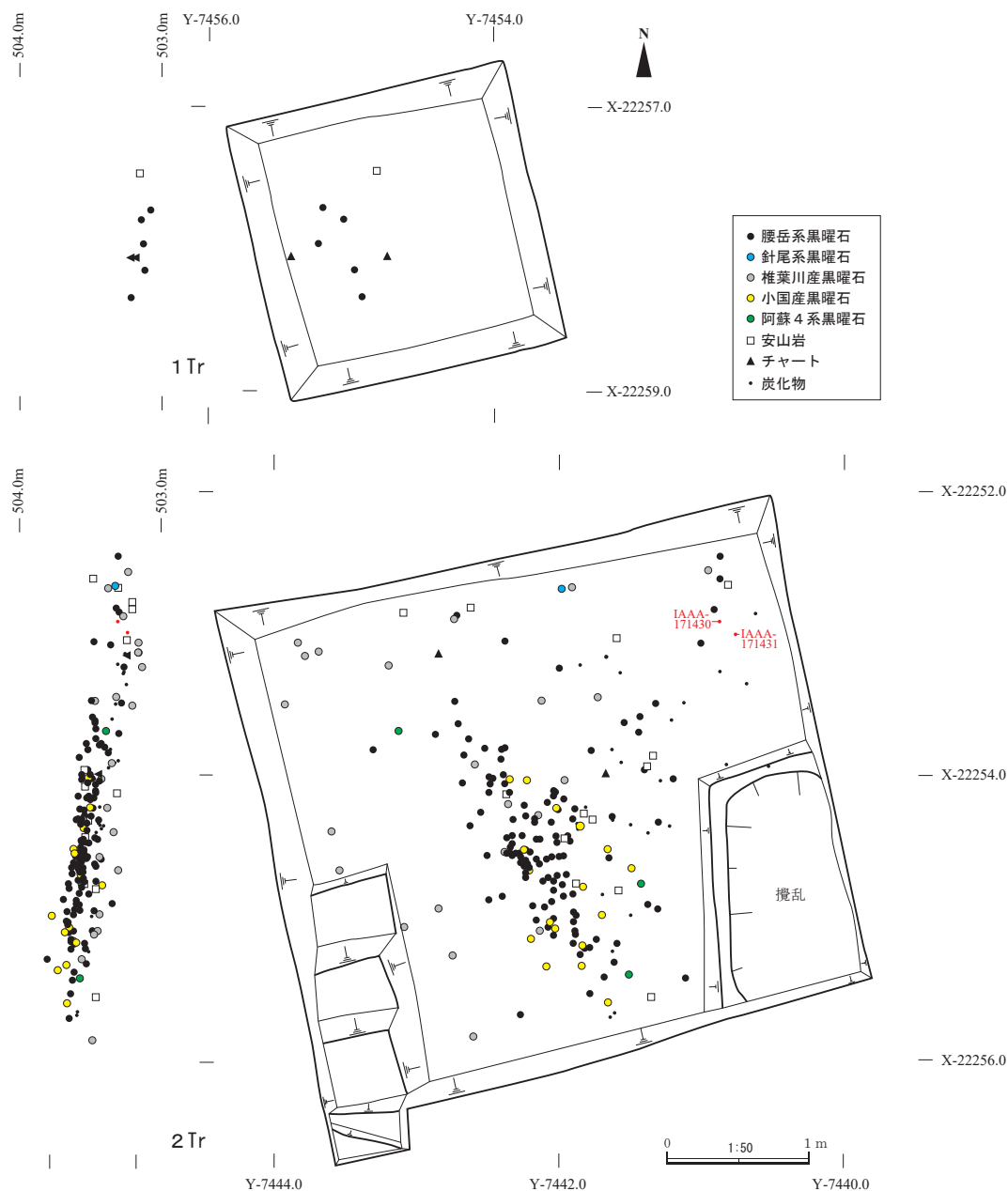


第 16 図 第 2 文化層遺物分布図 (全体)

2 トレンチとも 6 層は約 30cm の厚みをもつが、石器は層中から万遍なく出土する。出土点数は 1 トレンチで 9 点、2 トレンチで 178 点と後者での出土数が圧倒的に多い。1 トレンチでは出土点数が少ないがやや西よりに、2 トレンチでは調査区の中央部に密集して分布する傾向を示す (第 16 図)。ただし、2 トレンチの南西隅には、少なくとも 7 層の深度まで現代の攪乱が到達しており、本来はこの部分にも石器群が分布していた可能性が高い。なお、この石器集中の中央に 30cm 角のサンプリングエリアを設け、層厚 30cm を 3 等分して水洗選別作業をおこない、黒曜石碎片 2 点が検出された。また、炭化物は 2 トレンチの中央から東方にかけて分布するが、いずれも小片であり、サンプリングエラーも十分に考えられる。

出土石器は剥片や碎片が大多数を占めるが、少量ながら細石刃、細石刃核、削器などの定型石器が認められる。利用石材のほとんどは黒曜石であり、非黒曜石石材は客体的である。これらには、おおむね黒曜石は細石刃に、非黒曜石は削器などの利器にという選択的利用あるいは器種による作り分けが認められる (第 4 表)。ただし、黒曜石の中でも小国産黒曜石や阿蘇 4 系黒曜石の細石刃は認められない。石材別にみると、もっとも出土点数が多いのは腰岳系黒曜石製石器で 110 点、ついで椎葉川産黒曜石製石器で 23 点、小国産黒曜石製石器 17 点と続く。前 2 者は、細石刃に関わる石材であるが、器種別点数には注目すべき違いが認められる。すなわち、腰岳系が細石刃 9 点、細石刃核・石核が 3 点、その他剥片類が 98 点であるのに対し、椎葉川産は細石刃 22 点、剥片 1 点という構成になる点である。こうした点は、石器群荷担者の行動履歴等を示している可能性が高い。この点はそれぞれ項で検討をおこなったのち、改めて考えてみたい。

さて、これらの石材別と器種別の分布について出土点数の多い 2 トレンチの状況を確認する (第 17・18 図)。まず石材別分布について、当然のことであるが、最も出土点数の多い腰岳系黒曜石がこの石器群分布の様相をほぼ反映してる。すなわち、2 トレンチ中央に分布の中心がある。針尾系黒曜石は 1 点のみの出土であるが、ブロックの周縁に分布する。椎葉川産黒曜石はかなり散漫な分布を示し、石器集中部の周縁部からも出土している。集中する様相は認められない。興味深いのは垂直分布であり、他の石器群に比べやや下位から出土している。平面分布は他の石器群と重複するため、これが時間差を示すかどうかは、なお慎重でありたい。一方、小国産黒曜石は石器群集中部の南にやや集中する様相を示す。阿蘇 4 系黒曜石は集中部の周縁で出土するように見えるが、出土点数が少ないため傾向はというほどではない。非黒曜石である安山岩とチャー



第17図 第2文化層遺物分布図(石材別)

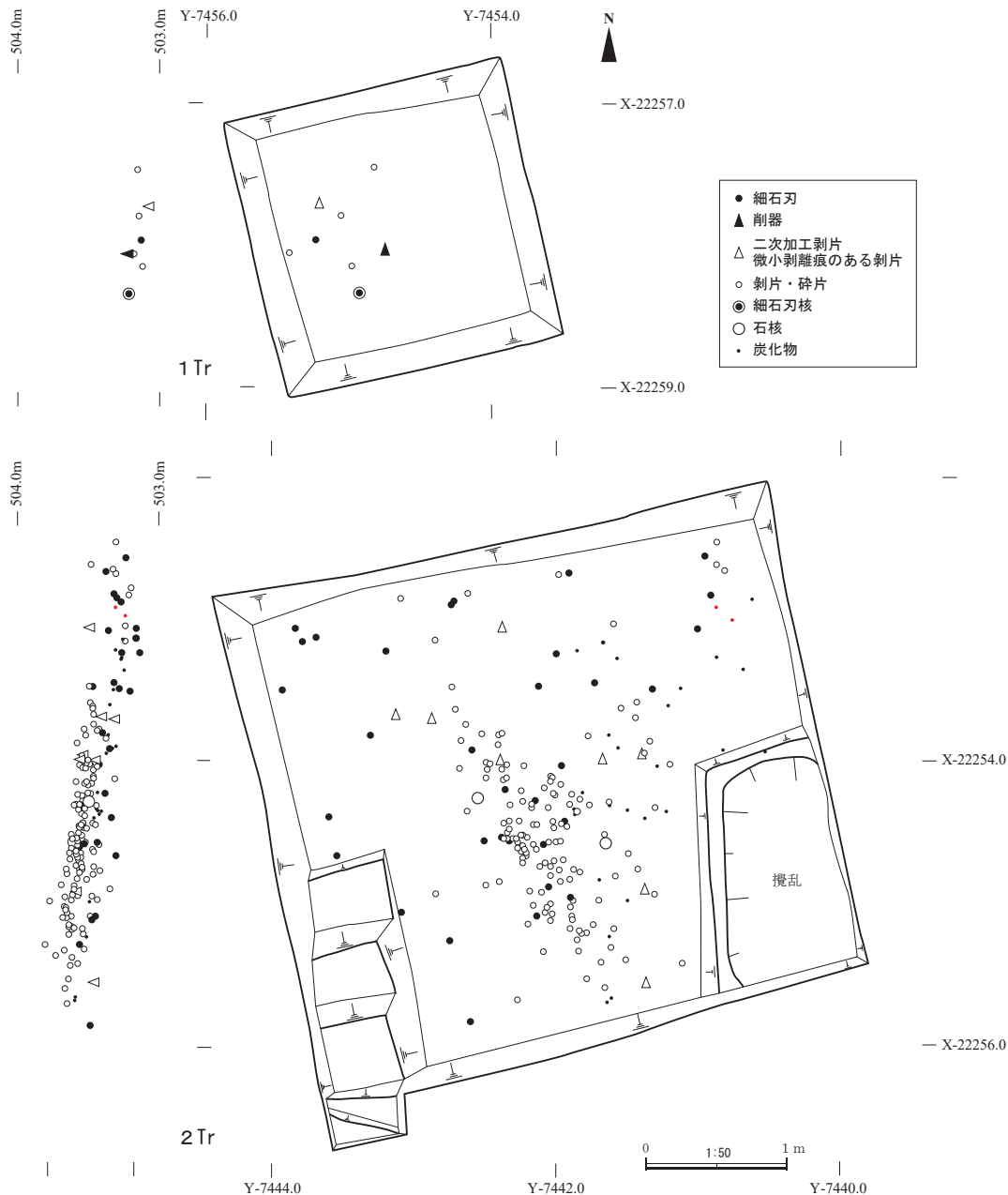
トは、石器集中部とは関係なく散漫に分布する傾向がある。次に器種別分布についてみておく(第18図)。

石器集中部の中心を構成しているのは、剥片、碎片類である。細石刃は集中部でも出土しているものの、集中部の周縁部にも分布している。これは椎葉川産黒曜石の分布が反映されている。二次加工や微小剥離痕のある剥片、そして石核は集中部のやや周縁に分布する。以上のように、器種による石材の違いや石材による消費のにあり方に差が認められ、石器群の平面分布にも石材や器種に差異が認められる。これらの差異を念頭において、以下では石材別に分布、個別石器について記述する。なお、石器の計測値等の詳細は巻末の第12～15表を参照されたい。

## (2) 石材別分布と出土遺物

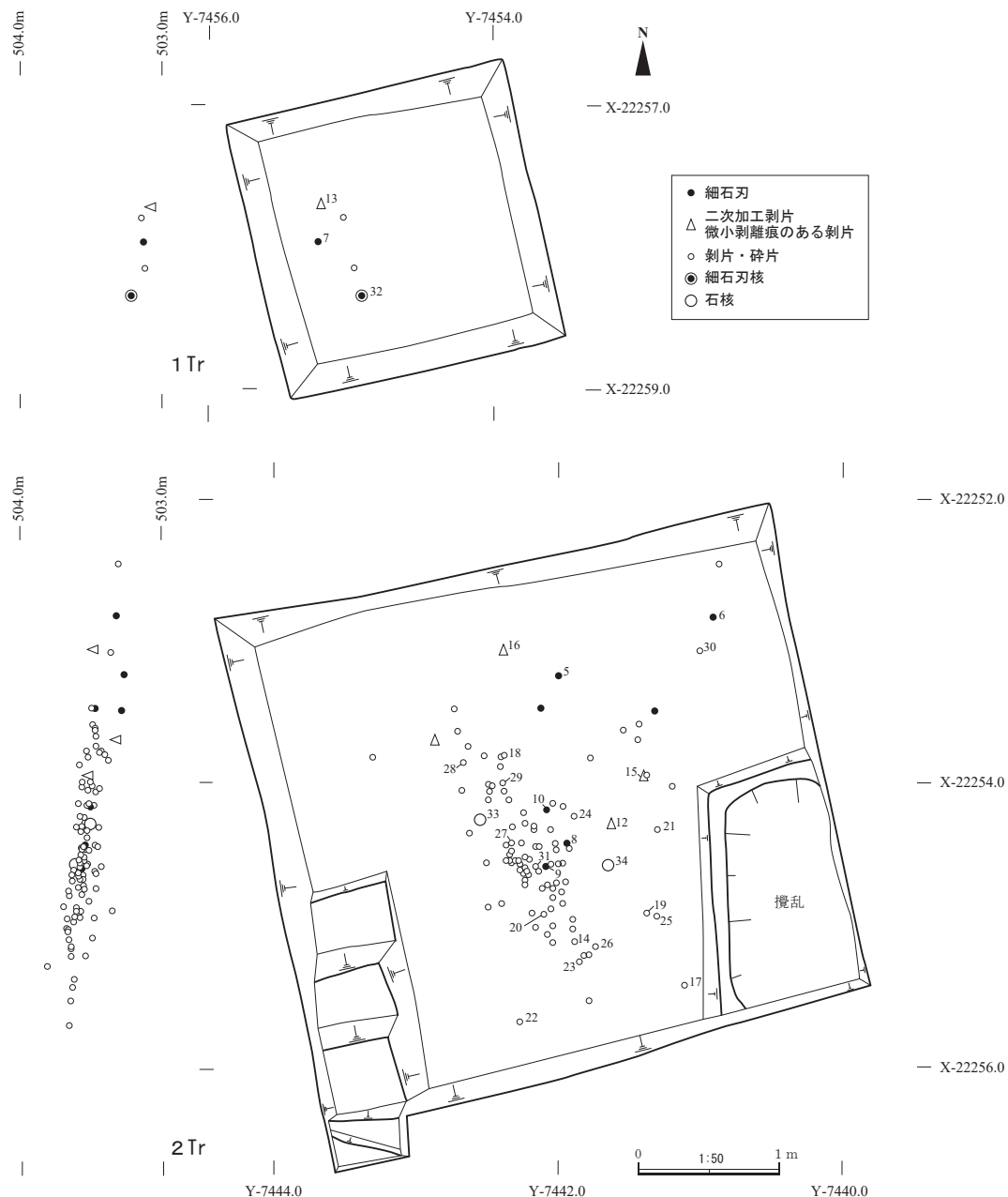
### a. 腰岳系黒曜石

腰岳系黒曜石は110点出土した。平面分布の中心は2トレンチのほぼ中央にある(第19図)。腰岳系黒



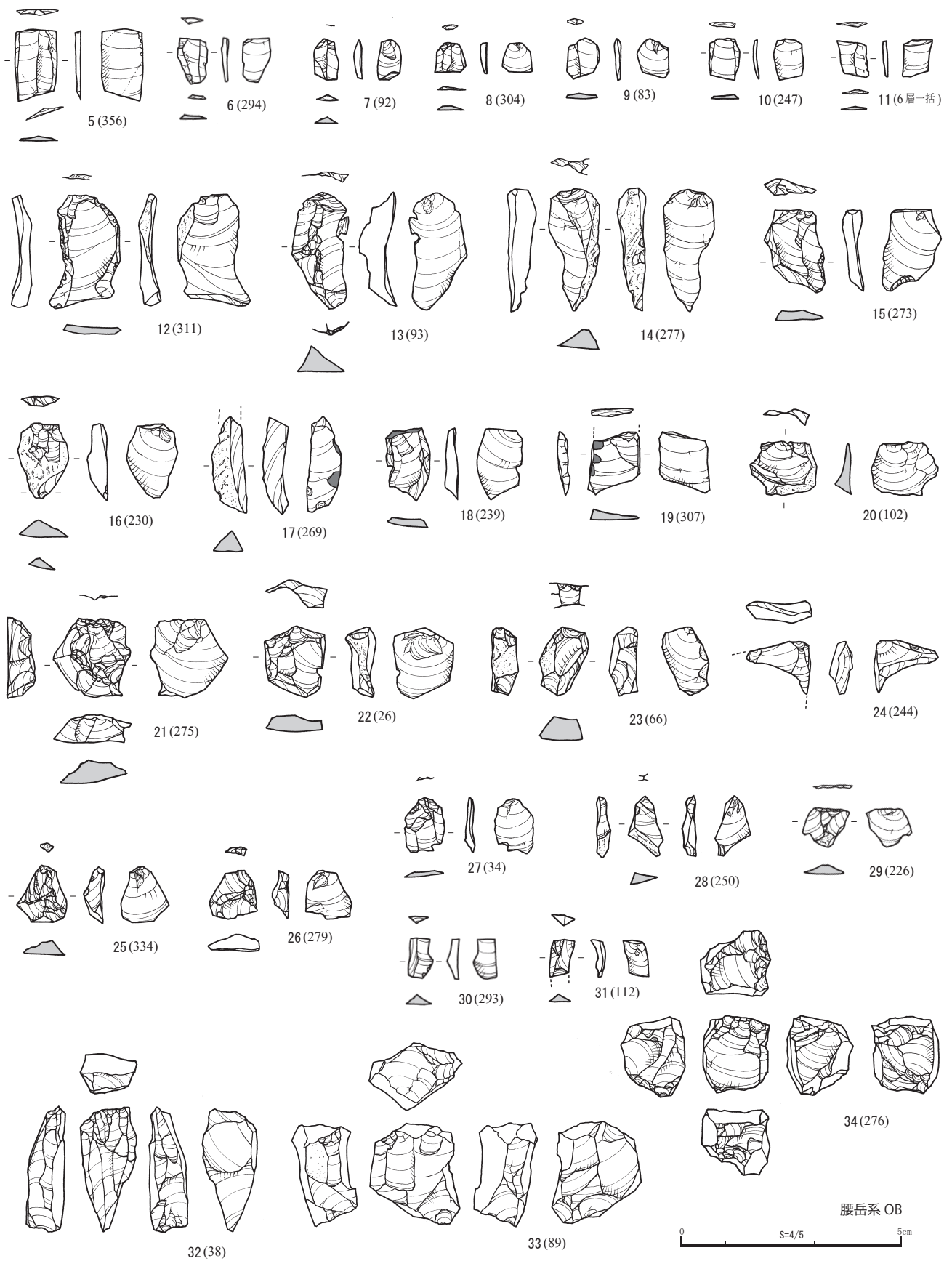
第 18 図 第 2 文化層遺物分布図 (器種別)

曜石の器種別分布をみると、剥片、碎片類が集中部を形成し、この周縁にツール類や石核が分布することが読み取れる。次に、出土石器について記述する。腰岳系黒曜石製石器は、細石刃 9 点、微小剥離痕のある剥片 5 点、細石刃核 1 点、石核 2 点、剥片・碎片 93 点で構成される。第 20 図 5～11 は細石刃。5 は幅広く両側辺と稜線が平行する端正なもので、左側縁腹面に微小剥離痕が認められる。その他の細石刃は形態的にややいびつである。打面を残す 7～9 のうち、7 と 8 には頭部調整が認められる。12～16 は微小剥離痕のある剥片。いずれも 2～3 cm 程度の小形の縦長剥片ないし不定形剥片の鋭利な刃部に微小剥離痕が認められる。12 は左側縁背面側に連続する微小剥離痕が認められ、ややノッチ状を呈する。13 は稜付 (小) 石刃の下端に微小剥離痕が密集する。16 も下端に微小剥離痕が認められ、これとよく似る。14 は (亜) 角礫素材の縦長剥片製で、右側縁に微小剥離痕が認められる。15 は矩形剥片の右側縁背面側と下辺腹面側に微小剥離痕が認められる。17～31 は剥片。背面に剥離痕が重複するものが多く、とくに 21 や 22、25、

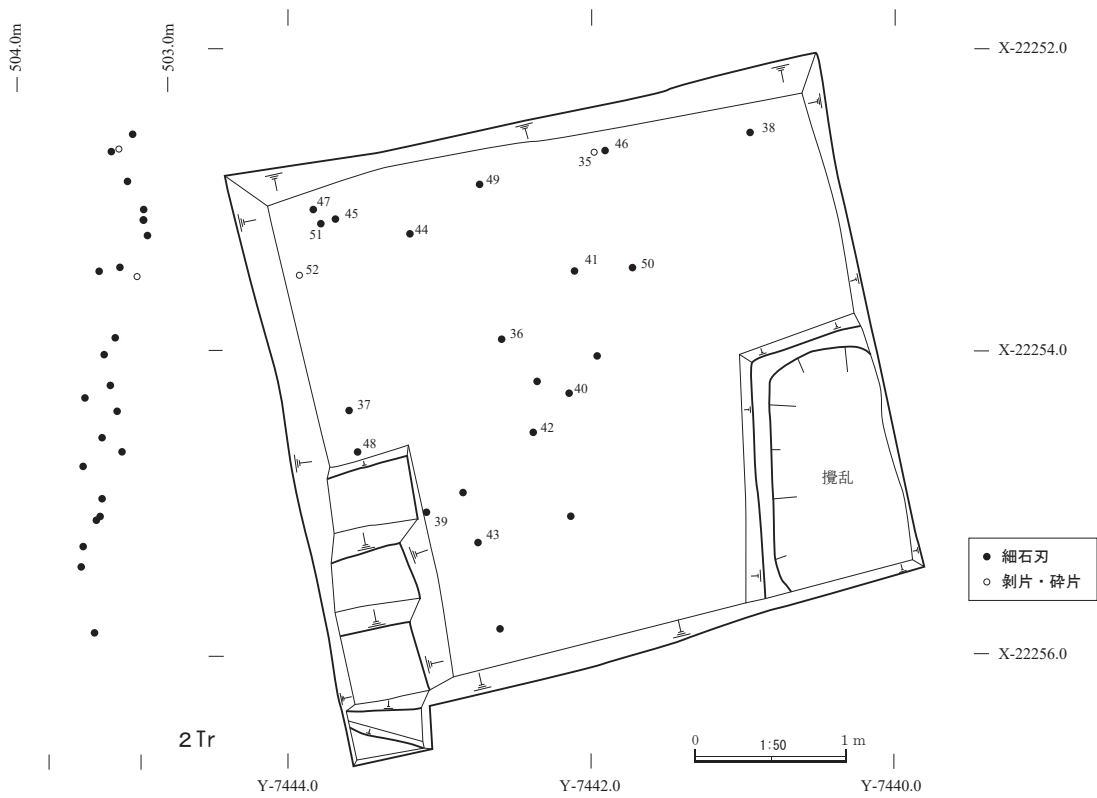


第19図 第2文化層遺物分布図（腰岳系黒曜石）

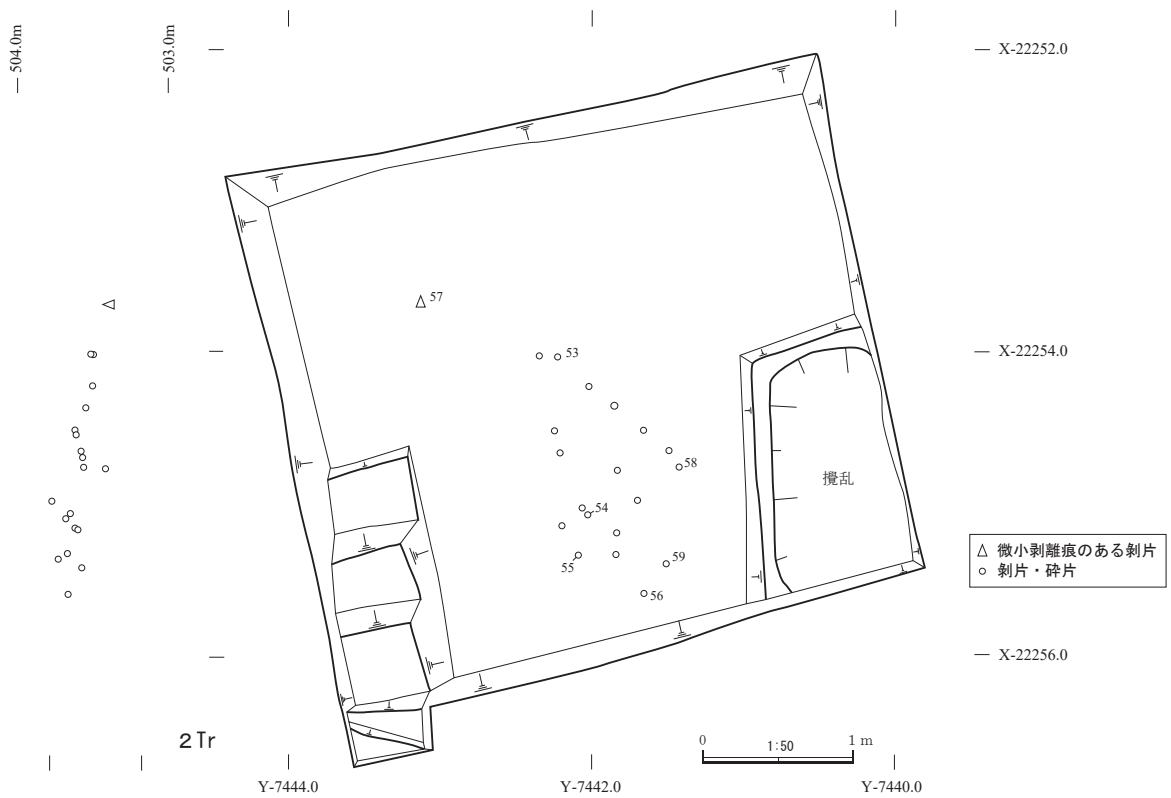
26などは細石刃核や石核の調整剥片と考えられる。24は楔形石器の欠損品である可能性がある。27、30、31は細石刃剥離の失敗品あるいは調整剥片と考えられる。32は剥片素材の野岳型細石刃核。単剥離打面で、上下両端から細石刃が剥離される。石核調整はほとんど認められない。少なくとも4回打面を転移しており、最終作業面では、打点付近に細かい剥離が集中する。これにより剥離が行き詰まり廃棄されたと考えられる。33、34は石核。33は左側面に（垂）角礫面が残存する。表面に平行する稜線が3条あり、少なくとも2本は細石刃状の剥片が剥離されている。これも単剥離打面である。その他の面は作業面ではなく石核調整面だが、丁寧な石核整形とはいいがたい。34は立方体状の形態を呈し、最終剥離面は一面いっばいの大きさの剥片を剥離した痕跡を残す。その他の面では小型の剥片をいくつも剥離しており、打面転移を繰り返していたことがうかがえる。



第 20 图 第 2 文化層出土石器 (腰岳系黑曜石)

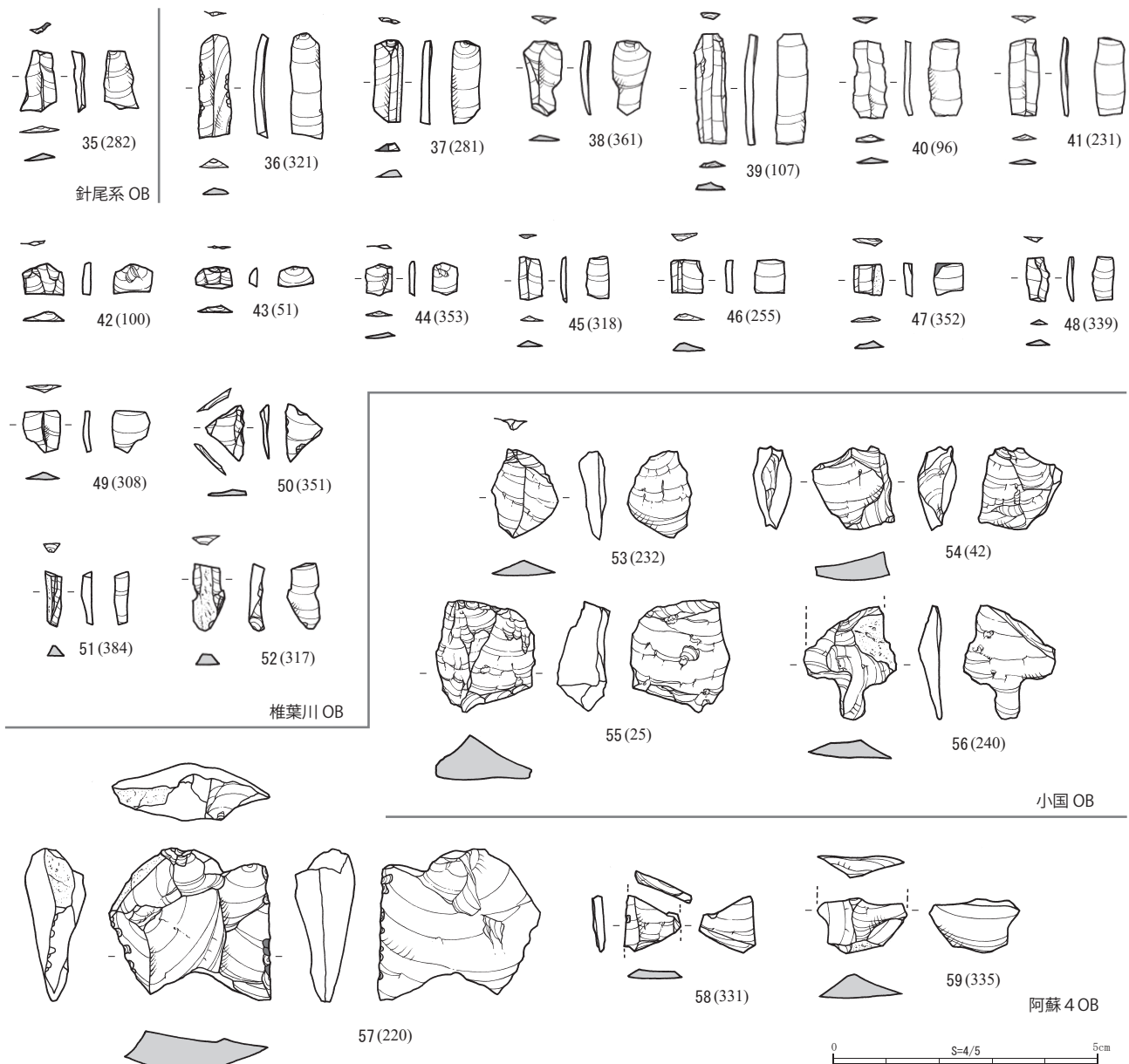


第 21 図 第 2 文化層遺物分布図 (針尾系・椎葉川産黒曜石)



第 22 図 第 2 文化層遺物分布図 (小国産・阿蘇 4 系黒曜石)



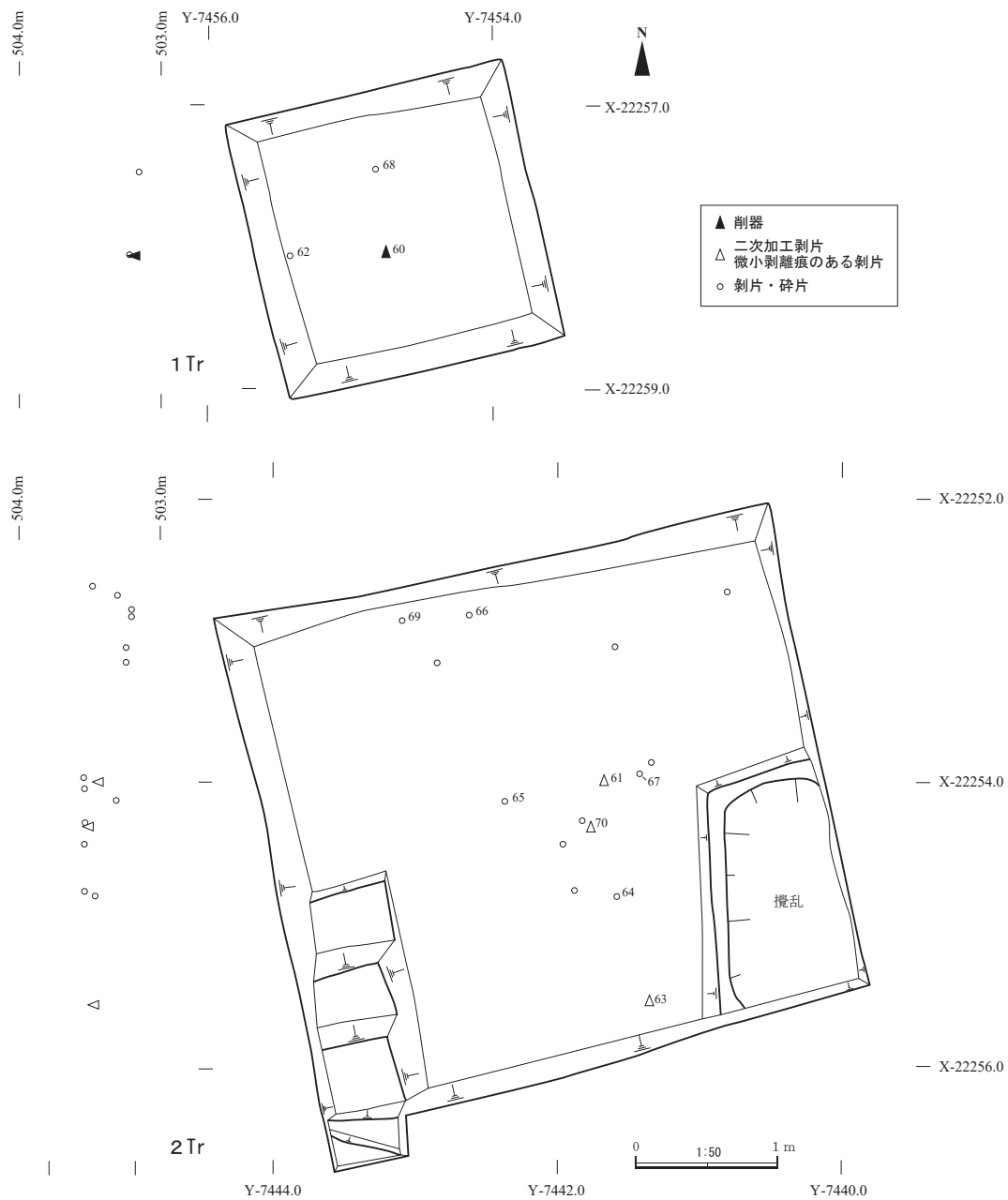


第 23 図 第 2 文化層出土石器（針尾系・椎葉川産・小国産・阿蘇 4 系黒曜石）

#### b. 針尾系・椎葉川産黒曜石

針尾系黒曜石は 1 点のみであるので、椎葉川産黒曜石製石器とともに記述する。先述の通り、両黒曜石は集中部をなさず散漫に分布し、第 2 文化層石器群の集中部の周縁部に分布する傾向がある（第 21 図）。器種はほぼ細石刃に限られるので、この傾向は器種別分布にもそのまま当てはまる。

第 23 図 35 は針尾系黒曜石製の細石刃状の剥片。形態的に下端がやや開くこと、打面部に捻じれが認められることから「細石刃状」とした。椎葉川産黒曜石は細石刃 22 点（36～51）、剥片 1 点（52）で構成される。36～38、44～46 は打面を残す。36、38、44 には頭部調整が認められないが、それ以外には認められる。36 の背面には石核の素材面を残し、両側縁全体に微小剥離痕が観察できる。42、43 はバルブ部分のみを折取ったものである。39～41、45～51 は中間部。39～41 は 2cm 以上のもので、縁辺には微小剥離痕が確認でき、とくに 40 は刃こぼれが著しい。45～51 は、短く折断されたものや細身のものである。46 や 50 には微小剥離痕が認められる。52 は背面中央に自然面を残し、その両側には両側辺に平



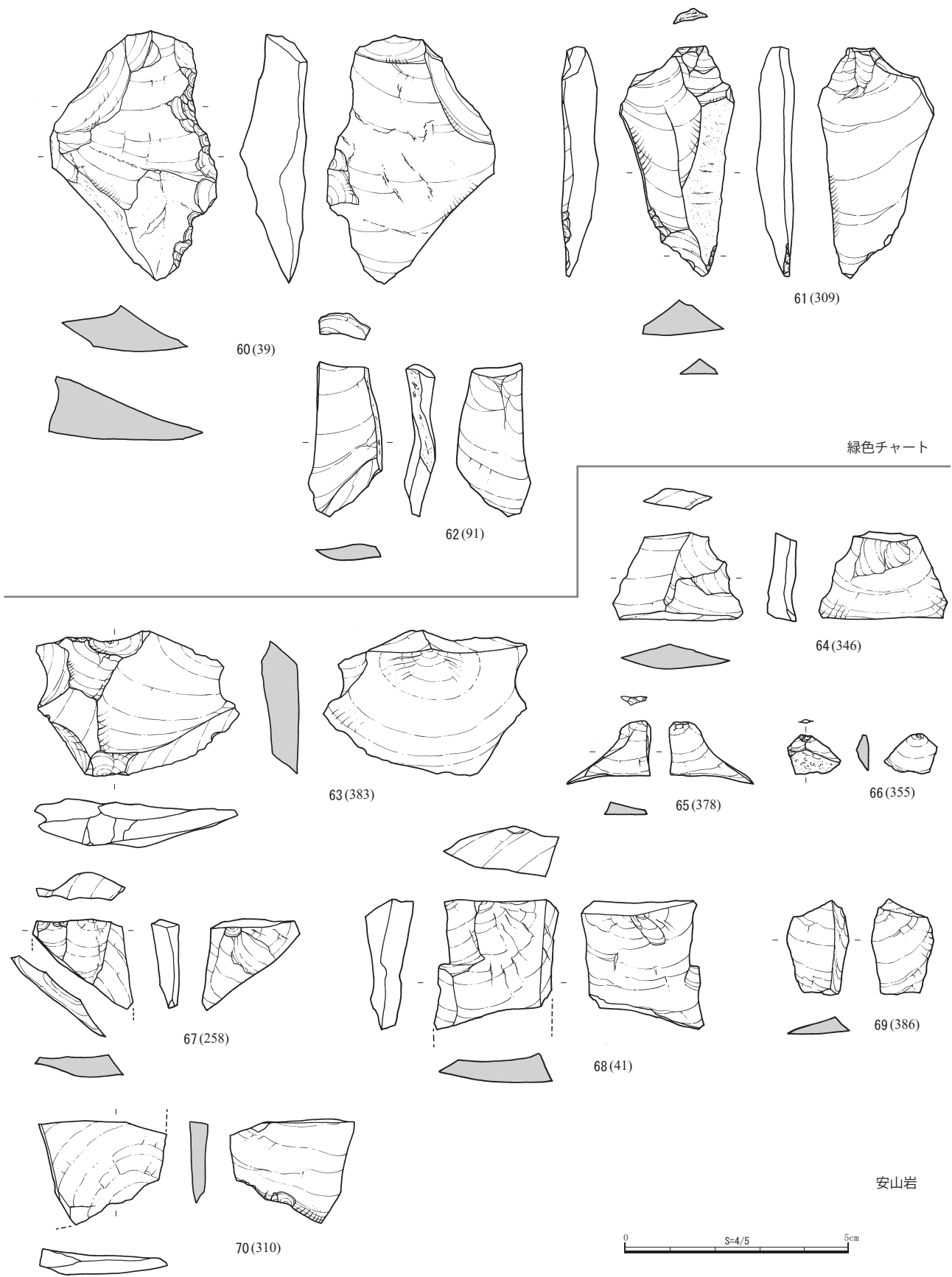
第 24 図 第 2 文化層遺物分布図 (チャート・安山岩)

行する稜線が認められる。細石刃剥離の初期段階のものであろう。こうした剥片や使用には適さないほど小さな細石刃も認められることから、ごく小規模な細石刃剥離はおこなわれた可能性がある。椎葉川産黒曜石の細石刃はその幅が 0.5 ~ 0.6cm と、腰岳系黒曜石の細石刃 (5) の幅 0.7cm に比べてやや細身である。

### c. 小国産・阿蘇 4 系黒曜石

両黒曜石は阿蘇 4 系黒曜石に微小剥離痕のある剥片が 1 点あるのを除いて、全て剥片である。分布は先述のとおり、石器集中部の南辺にやや密集する傾向がある (第 22 図)。

第 23 図 53 ~ 56 は、小国産黒曜石製の剥片。すべて打面部付近を欠損する。球顆が多量に含まれることがこの黒曜石の特徴であり、剥片も不規則な形態を呈する。56 の背面には自然面を残す。57 ~ 59 は阿蘇 4 系黒曜石製の微小剥離痕のある剥片 (57) および剥片 (58・59)。57 は厚みをもつ不定形剥片の左右両側辺に微小剥離痕を有する。58・59 は上下端あるいは上端を欠損する。



第 25 図 第 2 文化層出土石器 (チャート・安山岩)

#### d. 非黒曜石（チャート・安山岩）

黒曜石以外の石器は出土点数自体が少ないが、石器集中部のほか周縁部にも分布が認められる。本文化層石器群の唯一の削器は1トレンチで出土した（第24図）。

チャート製石器は4点出土した（第25図60～62）。全て緑色チャートであるが母岩は異なる。60は、削器である。大ぶりの不定形剥片を素材として、その右側辺全体に二次加工を施す。特に上部と下部はノッチ状になる。背面左下端に自然面を残す。上端および左側縁上部は欠失しているが、意図的に打ち欠いた可能性もある。61は微小剥離痕のある剥片。背面左側および打面に自然面を残す縦長剥片を素材とする。微小剥離痕は下端の両側辺に認められる。62は剥片。全体にやや捻じれる。右側面に自然面を残す。

安山岩製石器は15点出土した。これらはガラス質が強く良質なものと粉をふくような表面状態に風化するものに分けられる。前者は肉眼観察では西北九州産で4点（63～66）、後者は大津町の岩戸神社周辺で採取できるもので11点（67～70）である。63は二次加工剥片。幅広の不定形剥片の下端に2回の打撃による剥離痕が認められる。64～66は剥片。目的的な剥片というよりも調整剥片の類か。66の背面には自然面を残す。67、68は縦長剥片。いずれも単剥離打面で、頭部調整は認められない。背面には連続的な縦長剥片の剥離痕跡が認められる。69、70は不定形剥片。69は中心割れを起こしており、70は打面部を大きく欠損する。

#### e. 石材の搬入と消費の様相

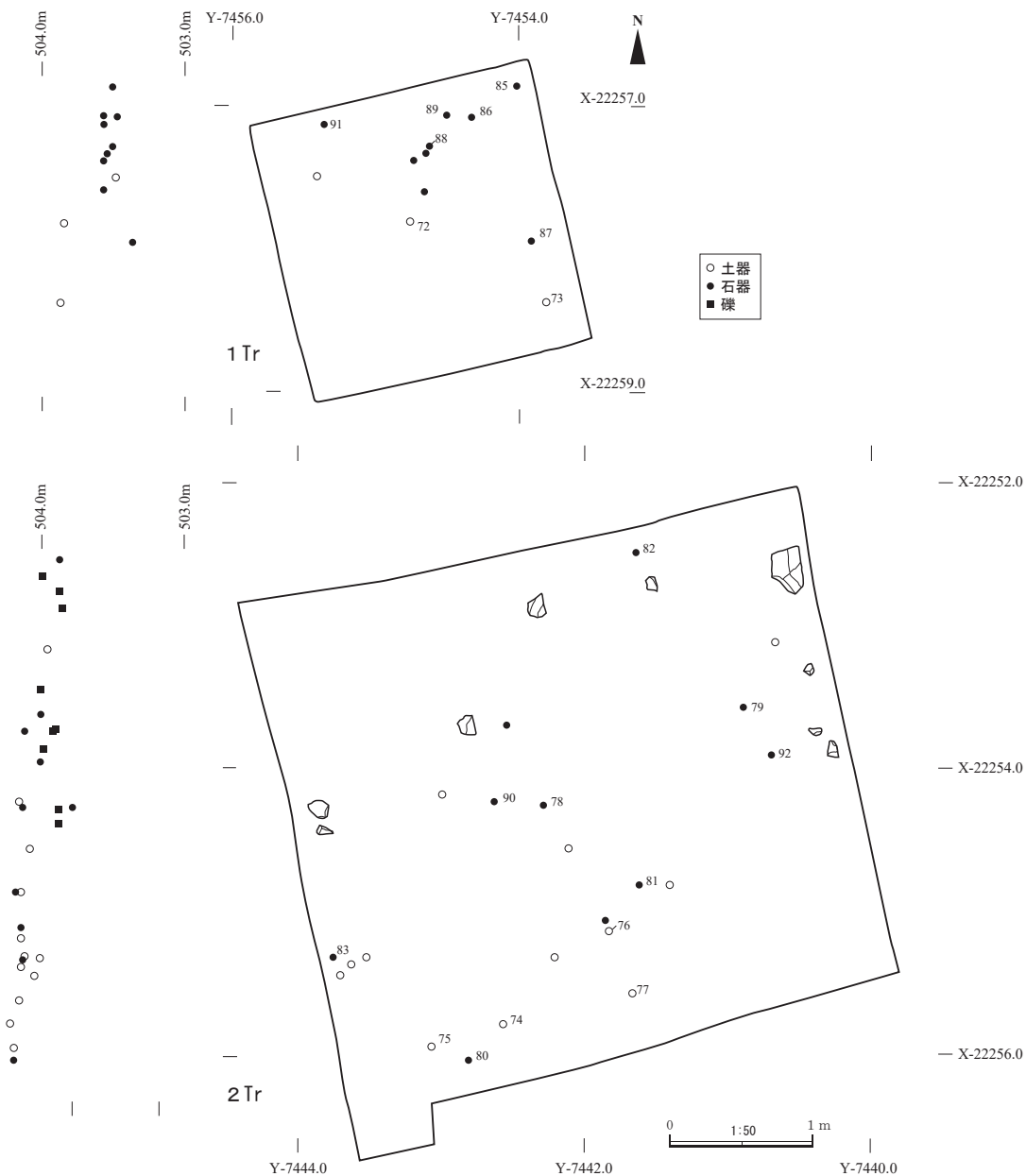
以上のように、石材ごとに石器の内容にばらつきがある。これを石材の搬入、消費という観点からまとめる。遺跡内での製作痕跡が最も明瞭なのは、腰岳系黒曜石である。細石刃と細石刃核、剥片と石核がみられ、特に剥片類が2トレンチ中央部にかなり密集して分布する。碎片には2～3mm程度のもも見られる。これらのことは、遺跡内での石器生産活動の存在を支持する。ただ、110点の点数に比して重量は約30gにすぎず製作規模はかなり小さいことが明白である。これと対照的なのが、針尾系と椎葉川産黒曜石である。この両者はそもそも製作痕跡をほとんど残していない。先述のとおり剥片がみられるため小規模な石器製作がおこなわれた可能性があるが、細石刃状態での搬入が主体であると考えられる。小国産黒曜石と阿蘇4系黒曜石は少量しか出土していないが、いずれも剥片であり、これらの単体搬入は考え難いことから、遺跡内での小規模生産を考えておきたい。非黒曜石のうちチャート製石器は、単体で搬入された可能性がある。とくに削器と微小剥離痕のある剥片は、共有する母岩もなく、他の石器と比べて形態的に整っていることもその根拠である。一方、安山岩製石器は、チャートと同様に点数自体は少ないが、ほぼ剥片のみで構成され、目的的な剥片もほとんど認められないことから、遺跡内で一定の生産活動があったと考えたい。

石器生産とともに使用行動も見られる。特に腰岳系黒曜石には微小剥離痕のある剥片が5点見られ、定形的ではないものの加工具として利用されたと考えられる（詳細は第6章1を参照されたい）。これらは2～3cmの石器であり、対象物もかなり小型であったことを想定させる。一方、チャート製石器は相対的に大ぶりで、腰岳系黒曜石製石器とは異なる使用法あるいは対象物が想定できる。

### 3. 第3文化層

#### (1) 遺物・礫の出土状況

第3文化層は4層（および5層）の出土遺物群を基準とする。1トレンチから11点（土器3点、石器8点）、2トレンチから25点（土器14点、石器11点）の計36点が出土した。遺物は1トレンチでは北側



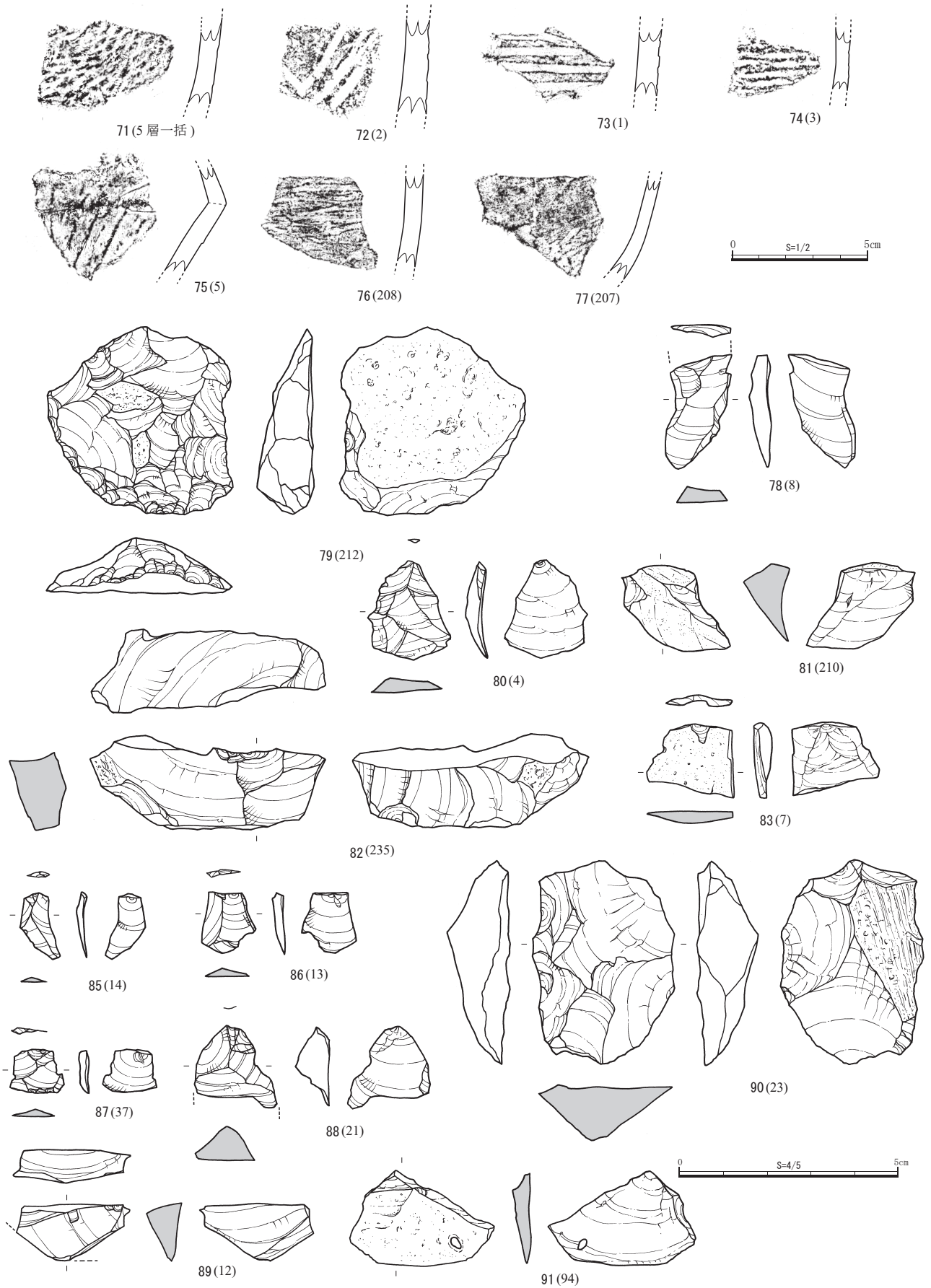
第 26 図 第 3 文化層遺物分布図

に偏る傾向が認められるが、2 トレンチでは全体に散在し、特に集中部などは見出せない。土器と石器の分布には基本的に重なる。これらの人工遺物のほか、特に 4 層中で拳大以上の大きさの礫（多孔質安山岩が主体）が散在する。被熱の痕跡などは認められなかったが、こうした礫が認められるのはこの層のみである。なお、図化していないが、1 トレンチ 4 層では、多孔質安山岩の角礫（20cm 大）が 1 点出土したが、周辺の掘り込みや被熱の痕跡などは確認できなかった。

第 5 表 第 3 文化層の遺物組成

	黒曜石			安山岩	チャート	象ヶ鼻	砂岩	土器	計
	腰岳	針尾	阿蘇 4	岩戸					
ESC					1				1
FL		5	1	1	3	1	1		11
CH	1	2							3
GT									1
CO				2		1			3
土器								17	17
計	1	7	1	2	4	2	1	17	36

土器は小片のみだが、一部には文様が認められる。石器は黒曜石製石器 8 点、それ以外が 9 点と両者が拮



第27图 第3文化層出土土器・石器

抗する。黒曜石は針尾系黒曜石製石器がやや多く、これらはすべて1トレンチから出土した。器種別には、搔器1点、磨石1点、石核3点のほかは全て剥片である。以下、個別に記述する。

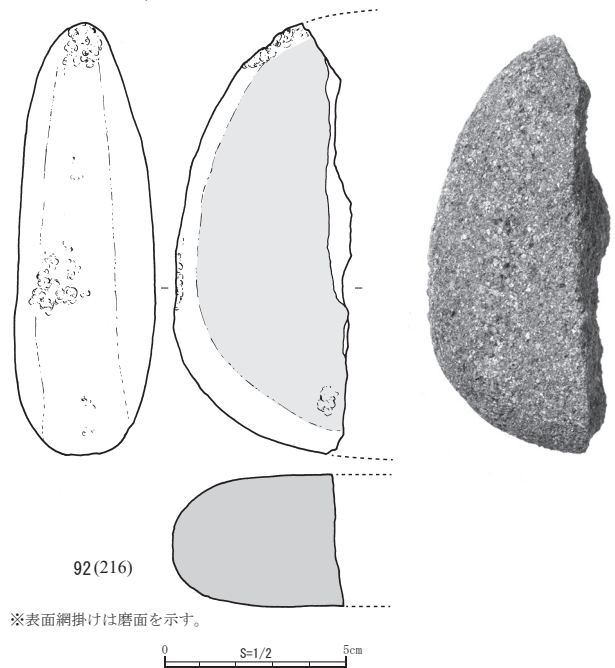
(2) 出土遺物

a. 土器

土器はすべて胴部片である(第27図71～77)。71は押型文土器。表面に楕円文が横位～斜位に施文される。内面ナデ調整。下菅生B～ヤトコロ式か。72は厚みもつ胴部片。外面に棒状の工具によりV字状の沈線文を施す。73は竹菅状の工具により横位あるいは斜位に沈線文を施す。内面ナデ調整。両者は手向山式の胴部上半部分と考えられる。74は擦糸文が横位に施文される。内面ナデ調整。75は屈曲する胴部片。屈曲部に粘土継ぎ目が認められる。屈曲部の上下にミミズばれ状の隆線が斜位に走る。内面にはナデ調整と指押さえの痕跡が認められる。手向山式か。78、79は無文土器の胴部片。外面は条痕調整で内面はナデ。以上の土器は、早期中ごろに位置づけられる。出土層位からみても矛盾はない。

b. 石器

第27図78は、阿蘇4系黒曜石の縦長剥片。打面部を欠損する。79～81はチャート製。79は搔器。節理面で割れたやや厚みのある剥片を素材として。下縁にスクレイパーエッジを作り出す。縁辺の潰れが著しい。80、81は剥片。81は背面全体が自然面に覆われる。82、83は象ヶ鼻産凝灰岩製。82は石核と考えられる。上半部は欠失するが、欠失後も剥片を剥離する。83は背面が自然面に覆われた剥片である。85～89は針尾系黒曜石製の剥片。85は形態的に細石刃に類似するが、押圧剥離によるものではない。すべて目的的なものとはいいがたく、調整剥片と考えられる。88は下部を、89は上部と左半を欠損する。90、91は岩戸神社産安山岩製と考えられる。90は石核。自然面を有する分厚い剥片を素材として、表裏両面で求心状の剥離をおこなう。断面形は逆三角形を呈する。91は背面が自然面で覆われた剥片。第28図92は磨石。粒子の粗い砂岩製で片面のみに磨面が認められる。側面中央および上端には、軽微ながらアバタ状の敲打痕が認められる。



第28図 第3文化層出土磨石

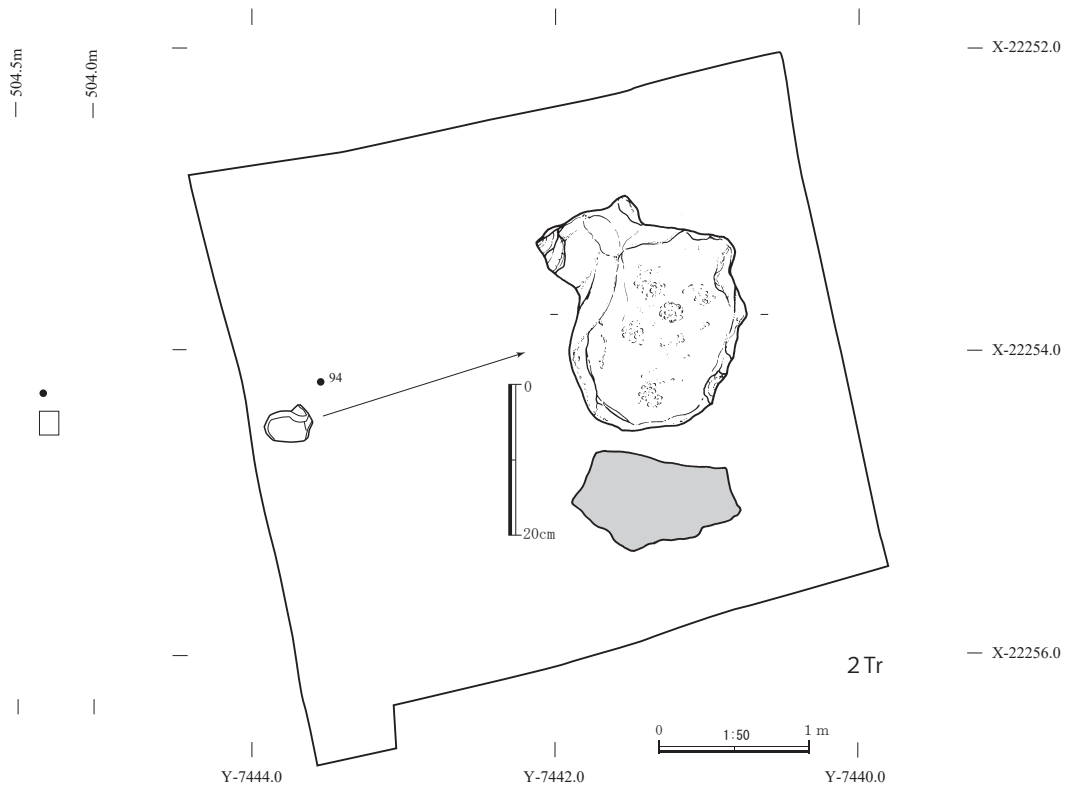
4. 第4文化層

(1) 遺物の出土状況

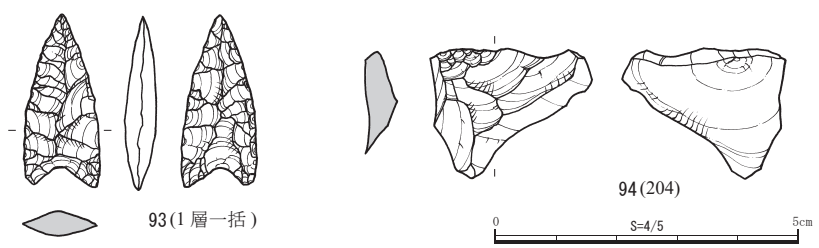
第4文化層は2層および3a層付近を出土層準とする。遺物が出土したのは2トレンチのみで、調査区北西隅の石皿(あるいは台石)および石鏃と剥片がそれぞれ1点である。石皿は第2次調査時点では、小土坑の中位付近に浮いた状態で埋まっていると判断していたが、第

第6表 第4文化層の遺物組成

	黒曜石		安山岩	チャート	土器	計
	腰岳	阿蘇4	西北			
AH		1				1
FL			1	1		2
CH	1					1
土器					6	6
計	1	1	1	1	6	10



第 29 図 第 4 文化層遺物分布図



第 30 図 第 4 文化層出土遺物

3次調査で改めて、掘り込み等を精査したところ、そうした痕跡を認めるのは困難であるとの結論にいたった。土器の出土がきわめて少なく（全て一括資料として取り上げ）、小片であったことから、これらの遺物の時期は不明と言わざるをえないが、石鏃や石皿の存在から縄文時代の中に収まる可能性が高いと思われる。ここではアカホヤ降灰以降の縄文時代のいずれかの時期と考えておく。

(2) 出土遺物

第 29 図に図化したのは石皿（あるいは台石）。長辺 33cm、短辺 26cm で、表面にはあばた状の敲打痕と考えられる痕跡が残る。裏面には自然面の凹凸がある。第 30 図 93 は阿蘇 4 系黒曜石製の石鏃。凹基式だが基部の抉りはやや弱い。表裏面とも非常に丁寧な調整剥離が認められ、断面形はレンズ形を呈する。94 は安山岩製の剥片。良質なもので肉眼観察では西北九州産であると推測される。幅広で背面には数枚の剥離痕跡が認められる。何らかの調整剥片であろうか。